

活動分野	森に親しむ懇談会(もりこん) 149		
タイトル	学名四方山話		
実施日時	平成29年11月17日(土) 18:45~20:45		
実施場所	船橋中央公民館第2集会室		
受講者	10名	FIC会員	10名

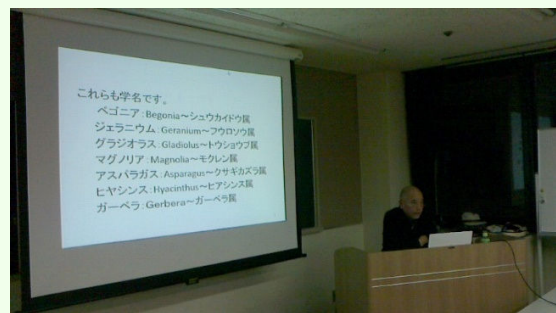
活動の内容

講師は千葉県森林インストラクター会の樋口多聞さん。  
 今回は「学名四方山話」と題して『日頃、図鑑に書かれていても、見なくてちっとも困らない「学名」、実は不思議で面白い世界。』。そんな学名に纏わるトレビアの数々をお話していただいた。

- なぜ「学名」が必要なのか。  
 「世界中で通用する名」としての「学名」が必要になる。
- 学名の基本の基本ルール  
 (1) 属名+種小名(+命名者)→「二名法」~たった2 words で世界中の生物を確定できる!  
 (2) 言語は全てラテン語~語尾が様々に変化するが騙されないように注意  
 同じ「日本の」という意味でも、japonicus、japonicum、japoniocaなどに化ける  
 意味はその生物の特徴を表す形容詞、発見者や関係者の名前、生育地など  
 (3) 一度命名されたら、原則として変更されない(最近塩基配列による分類で変更が頻発)  
 例外例: 以前は、サクラ属 Prunus(P.と略)は様々な種を含む広い属だったが、最近の図鑑ではサクラ属 Cerasus、ウワミズザクラ属 Padus、バクチノキ属 Laurocerasusなどに分割され、Prunusはスモモ属に限られた。
- 学名の決め方:「国際植物命名規約」に基づく。公的な印刷物で早い者勝ちの発表など
- いろいろな学名~「属名」と「種名」では、似ているようで性格が異なる。  
 「属」 [日本語起源] アケビ属 Akebia、ツガ属 Tsuga、ササ属 Sasa  
 Aukuba(アオキ属~アオキバ)、Fatsia(ヤツデ属~「八手(ハッシュ)」) からなど  
 [植物の部位] dendron: 木、Liriodendron~Lirio はユリでユリノキ属、  
 Phellodendron~phelloha コルク→コルクの木でキハダ属(樹皮が厚くコルク質)  
 anthos: 花、spiranthes~speira は螺旋で螺旋の花→ネジバナ属。Chionanthus~  
 Chionは雪、雪のような花→ヒトツバダコ属、carpos: 実、Callicarpa~calloは美しい、  
 美しい実→ムラサキシキブ属、などなど。  
 「種小名」は形容詞、または、同格の名詞~姿・形、性質、人名・地名など  
 crenata(円鋸歯状の)~ブナ: Fagus crenata (Fagusは食べる)、grandiflora(大きな花の)  
 ~タイサンボク: Magnolia grandiflora (Magnoliaは仏人のMagnol)、odora(香り)~  
 ジンチョウゲ: Daphne odora (Daphneはギリシャ神話のニンフ)、tectorum(屋根の上の)  
 ~Iris tectorum: イチハツ、makinoi(牧野富太郎の)~Chrysanthemum makinoi:  
 リウノギ、bosopeninsulae(房総半島の)~Cirsium bosopeninsulae: 加サマザミ、  
 noli-tangere(我に触れるな)~Impatiens noli-tangere: キツリフネ(触ると弾ける)、等々  
 なるほどと思うことから、どうして?まで、紙面が足りないほど興味の尽きないお話でした。



参加者から質問が活発にあった



学名トレビアで時間ぎりぎりまで白熱した